

施設だより

大雪山自然教育研究施設Web pageの改訂計画について

大雪山自然教育研究施設研究員，旭川校 浅川 哲 弥

平成8年4月より，大雪山自然教育研究施設は，Web page(URLは<http://taisetsu.asa.hokkyodai.ac.jp/>)を開設し，施設紹介や，大雪山自然教育研究施設研究報告の全号の目次情報，30号以降の研究報告全文データベース，大雪山の植物，地質・地形，雪の結晶のマルチメディアデータベース「大雪の自然」等をインターネットに公開している．特に，大雪山自然教育研究施設研究報告全文データベースは，毎年刊行される研究報告を逐次データベース化しており，昨年度はフレームを用いたページ構成を採用し，今年度はPDF書類として公開している．PDF書類とすることによって，報告を印刷形態そのままのレイアウトで閲覧することができ，また高解像で印刷もできる．従って，データをダウンロードし，印刷することで容易に論文のリプリントを手に入れることができるようになった．

また本年度は，本施設の運営委員会で，さらにWeb pageの内容の充実をはかることを目的として，以下のようなWeb pageの更新を計画した．この一文では，その計画の内容と進行状況について報告する．

Web page 更新計画

平成10年6月24日の本施設運営委員会にて，本施設のWeb pageをより充実したものにすため，以下の様な更新内容を掲げて努力することになった．

1. 本施設所有の図書，文献の目録，地図等のデータベースの作成及び公開

本施設は多くの図鑑や各種の図書，報告などの学術文献を所有しており，その有効な活用を目指すために，それらの文献情報と各研究員が所有する大雪山関連の文献リストをデータベース化し，インターネットに公開しようというものである．

2. 「大雪の自然」part IIの作成

前述の植物，地質・地形，雪の結晶のマルチメディアデータベース「大雪の自然」は，大雪山の北部地区(黒岳，お鉢平，旭岳)のデータを収録している．そこで，トムラウシを含む南大雪のデータを収録する「大雪の自然」part IIを作成する．

3. 大雪山自然教育研究施設研究報告全文の遡及入力による全文データベースの拡充

29号以前の大雪山自然教育研究施設研究報告全文をスキャナーで，画像として読み込み，OCRソフトを用いて文字データとすることにより，大雪山自然教育研究施設研究報告全号にわたって，報文の全文データベースを作ろうというものである．

4. 大雪山関連のWeb pageのリンク集の作成

最近，Infoseek, gooなどの検索エンジン用いて「大雪山」というキーワードで検索すると，様々なWeb pageがヒットするようになってきた．そこで，本施設の活動に関連する内容を持つWeb pageに対してリンクをはり，その簡単な内容を紹介するリンク集をつくるというものである．

5. 大雪山関連の写真集等の充実

旭川校の教職員は旭岳をはじめ，大雪山に登山する機会が多いので，各方面に呼びかけ，大雪

山関連の写真をWeb pageに公開してもらおうという企画である。

6. 英文Web pageの作成

国際化の時代を背景に、本施設のWeb pageの英語版を作成し、広く海外からの利用の促進、情報の交換を目指す計画である。

進行状況

上記の計画を遂行するために必要とされる機器、ソフトウェアとして、イメージスキャナー(UMAX 1220S)、ファイルメーカープロ ver.4、ファイルメーカーホームページ ver.3.0を購入した。イメージスキャナーは、画像資料のデジタル化のためである。また、ファイルメーカープロ ver.4は、大雪山関連の図書、報告などの文献情報のデータベース化に用いる。さらに、ファイルメーカーホームページ ver.3.0は、ファイルメーカープロのデータベースをWeb page上で検索できるインターフェースを構築するためである。

1. 本施設所有の図書、文献の目録、地図等のデータベースの作成及び公開

データベースの作成の前段階として、図書、文献の目録、地図等の整理中である。

2. 「大雪の自然」part IIの作成

現在、全くの計画段階に留まっている。

3. 大雪山自然教育研究施設研究報告全文の遡及入力による全文データベースの拡充

今年度は大雪山自然教育研究施設研究報告29号の画像ファイルを作成し、公開する予定で、作業を進めている。画像ファイルをOCRソフトを用いて文字データとすることは比較的容易であるが、報告の文字のポイント数が小さいためOCRソフトが正しく文字を認識できない可能性が高く、文字データとしてから、それを確認するために多大な労力が必要とされることが予想されるため、文字データ化は今後の課題としている。

4. 大雪山関連のWeb pageのリンク集の作成

各種サーチエンジンの検索結果を整理し、学術研究(4 links)、ガイド情報・解説・紹介(26 links)、写真・絵画・地図(35 links)、山行記録(15 links)の4つのカテゴリーに分類した計80サイトへのリンクを集めたリンク集を作成し、現在公開している。その中には、本施設研究員の浅川、和田助教授、及び、旭川校の市川助教授のWeb pageも含まれている。今後、さらに新しいサイトを加えていく予定である。

5. 大雪山関連の写真集等の充実

各方面に呼びかけたところ、旭川校の若原助教授から登山の際に撮影した写真を提供していただいた。これは今年度中に、Web pageに公開する予定である。

6. 英文Web pageの作成

氷見山施設長によって、トップページから2,3階層までのWeb pageの英語化が進んでいる。これも近日中に公開される予定である。

今後も、大雪山自然教育研究施設では、Web pageの内容をさらに充実していこうと考えています。特に「大雪山関連の写真集等の充実」や「関連リンク集の充実」に関して、情報をお持ちの方は、ぜひ浅川までご連絡いただきたいと思います。電子メールアドレスは asakawa@asa.hokkyodai.ac.jp です。

施設だより

大雪山自然教育研究施設見学会参加体験記

- 自然は教室であり先生でもある -

川 邊 淳 子

北海道教育大学旭川校(家庭科教育)

1. 参加のいきさつと準備

大雪山自然教育研究施設(以下研究施設と略します)見学会の参加者募集があり、気になってはいたものの、すっかり締め切りも忘れてしまっていました。そんなある日、中村先生から「すごく素敵な所ですから、行っていらっしゃい。」と背中を押されたかたちになり、それと同時に隠れていた大雪山への憧れもムクムクと沸き起り、出発前日だめもとで用度係にお願いに行きました。ところがあっさりOKをいただき、滑り込みセーフで参加を認めていただきました。

本州でも一年中温暖で雪が降ること自体が珍しい瀬戸内地方に育ち、4月に旭川校へ赴任したばかりの私には、大雪山というだけで季節構わず極寒の地というイメージがあり、どのような格好で行けばよいのか真剣に悩みこんでしまいました。先生方の諸説も様々で、「普通の登山と思えばいいですよ。」「ちょっと着込んで行った方がいいですよ。」「9月の末はもう上では雪が降っているかもね。」と、山や寒さに対して超初心者の私は、さらに混乱を極めてしまいました。結局中庸で行こうと決め、防寒のためにはフリース素材、色は山だから緑となぜか決め込み、前夜の準備は衣類の購入などで大変慌しくありました。

2. 研究施設の内外環境

子どものように嬉しさのあまり前日は寝不足でしたが、1998年9月29日の当日は、朝早くから異常に元気にお昼の準備に勤しみ、ウォーキングシューズに黒いリュック、緑のフリースに黒のパンツに黒のシャツを身にまとい、集合時間に間に合うように大学へと急ぎました。参加者は大雪山自然教育研究施設運営委員の先生方を中心とした先生方、留学生の方、用度係の方の10名程でしたが、ゴージャスにバスを貸し切り利用させていただき、9時過ぎ研究施設に向けて大学を出発しました。途中、やはり山を知り尽くされた先生方の楽しくためになるお話を聞いたり、大雪山の歴史の資料なども見せていただきながら予習万全で、約1時間半で研究施設に到着しました。道路沿いには看板がなく、初めての方には発見が少々難しいかもしれませんが、旭岳口-プウェイ駅よりも徒歩で約5分ほど下った右手にあります。すぐそばには小さな小川のせせらぎが聞こえ、9月下旬ということもあり、黄色く紅葉したきゃしゃなシラカバの木立の中に、ちょっと大ぶりな山小屋風の研究施設はひっそりと建っていました。研究施設内の説明をまず施設長の氷見山先生などから受けました。食事は完全自炊ですが、それもまた自然の中ならではの楽しさを得られそうですし、1階の食堂は大きく利用者の交流の場としても大活躍しそうです。また宿泊場所にも使える2階研修室は、和室で程良い広さもあります。また1階の教官研究実験室にはパソコンが設置されており、浅川先生のデモンストレーションにより、研究施設のホームページも見せていただきました。大雪の花などについてもこれからますます書き込みが増えるとのこと、研究施設利用にあたって大活躍しそうです。でも目玉はなんといっても温泉だと思えます。今回残念なことに私は入浴はしま

せんでしたが、内風呂の他に、小川に面した露天風呂があり、星を見ながらじっくりゆっくりつかれば、研修や登山やスキ - の疲れも吹っ飛びそうです。破格の低料金でこのような施設が利用できるのは、学生にとっても大変嬉しいことだと思います。また利用のマナ - の良さも目を引きました。通常共同利用施設だとどこかに問題点が出てくるものですが、非常にきれいに利用しており、使用する方も気持ち良く過ごせ、それゆえ帰る時の清掃も、次に来る人の事を思ってしていただくのを感じました。

3. ハチと大雪山系の絶景

今回の見学会には、施設見学の他に旭岳の散策も組み込まれていました。しかし、ロ - ブウェイへの乗車を待っている時、私は思ってもいなかった受難を受けました。それはハチ（今こうやって無事に原稿を執筆しているということは、おそらくスズメバチではなかったようです）に生まれて初めてチクリと刺されてしまいました。なぜか首の当たりが気持ち悪く、首に手をやった瞬間、注射針で刺されたような痛みが走り、視界の隅に黒っぽいちょっと大きめのハチが逃げて行くのが見えました。前述の服装選びでもおわかりのように、人一倍心配症の私は、一気に心臓がドキドキし始めました。なぜなら、少し前に札幌の小学生がハチに襲われて入院したことをニュースで見っていたからです。明日の新聞にはきっと私の事が・・・なんてことまで考えてしまいました。参加していた先生方にも、塗り薬をいただいたり大変でした。しかし、またも私の心配を増してしまうような情報を運悪く耳にしてしまったのです。「すぐにはどうなるわけでもなく、20分ほどたつと症状が出てくることもありますよ。」と。これから20分と言えば、丁度5合目へロ - ブウェイで行っている途中ではないかと。もはや我が人生これまでかと思い、がんがんに冷えたお茶の缶を気休めに首に当てながら昇って行きました。刺されて無事に20分、1時間を経過し、参加していた先生方にも心配をおかけしましたが、何とか姿見の池までたどり着き、朝作ったお弁当をほお張りしました。ちなみに、その日刺された時と同じ服装で薬局へ行き事情をお話すると、一言「その服装じゃだめです。」と言われてしまいました。ハチは黒っぽいものや緑みたいな暗い色のものには、敵だと思って襲ってくることもあるそうで、山に何度も行っている人にとっては常識中の常識かもしれませんが、私はすごく勉強になりました。蛍光色や白っぽいものを次回は必ず身につけていこうと決意をしました。それにしても、あの痛みからすると、ハチも自分の身を守るのに必死だったでしょう。

またその日は、旭岳の頂に雲一つもなく、はっきりくっきりと回りの山々の稜線を確認することもでき、非常に珍しいことだったようです。その澄み渡った空気と風景は最高でした。いつしか私もハチに刺されたことすら忘れ、今まで見たことのないような絶景を目に焼き付けるのはもちろんのこと、ポケットカメラに無心に収めました。橘先生には、今は子孫を残す態勢になっている花々について詳しく説明していただき、来年の7月頃、一面お花畑になる状況を想像し、また帰りがけにはきつねの突然の出現にも大喜びしながら下山していきました。

4. 最後に

最近、テレビで偶然大雪山の草花や動物たちの様子について目にすることがありました。特にウスバキチョウとコマクサの関係については興味深く拝見しました。本州でもコマクサは咲くそうですが、大雪山では、その中でも特に人の手が入らない険しい場所に豊富に咲き、それを食用としているウスバキチョウは大雪山だけに生息し、氷河期時代からの関係ができています。しかし、こんな厳しい環境下に、なぜ生きることを選んだのでしょうか。おそらく大雪山は、動植物に

とってとてつもなく厳しい環境であろうと思われます。しかし、時を超えた生命と生命とのこのような響き合いに触れ、その厳しさがあるゆえに、壮大かつ美しい一つの生命の輝きに触れられるのだと思うと、この素晴らしさを身をもって体験できるということは、筆舌に尽くしがたいものがあります。

2000年7月1日まで口 - プウェイは運休中です。再開すれば5合目までもスピ - ドアップし、一回の口 - プウェイの輸送人数も大幅にアップするそうです。しかし現在は、旭岳の5合目や山頂までは登山をするしかありません。しかし、いつもはス - ッと口 - プウェイで上を通り過ぎていた場所を、一步一步踏み締めて観察していくこともなかなかのものだと思います。まだ行かれていない方、どうぞ一度お足をお運びください。旭岳や研究施設は、自慢すべき北海道教育大学の財産だと思います。

施設記事

職員（平成10年度）

施設長	教授	氷見山 幸夫	（地理学）	（平9.4.1～）
研究員	教授	櫻井 兼市	（地学）	（昭53.4.1～）
	教授	平 一弘	（理科教育学）	（昭53.4.1～）
	教授	橘 ヒサ子	（生物学）	（昭56.4.1～）
	教授	矢 沢 洋一	（栄養生理学）	（昭61.4.1～）
	助教授	浅川 哲弥	（化学）	（昭57.4.1～）
	助教授	和田 恵治	（地学）	（昭59.4.1～）
	助教授	三浦 裕	（保健体育科教育学）	（昭59.4.1～）
施設管理人		大倉 幸男		（平9.1.25～）

運営委員会（任期 平成10.4.1～平成12.3.31）

委員長	施設長	氷見山 幸夫	（地理学）
委員		山田 好文	（音楽）
		山本 光朗	（史学）
		柳田 欣作	（生物学）
		芝木 美沙子	（看護学）
		秋葉 治克	（技術工業）
編集委員長		氷見山 幸夫	（地理学）

研究題目

エアロゾル及び雪結晶の観測	櫻井 兼市
大雪山周辺の第4紀について	平 一弘
北海道山地湿原の植物生態学的研究	橘 ヒサ子
湿原系アカエゾマツ林の分布構造の解析	〃
カワヤツメの生態とその生化学的研究	矢 沢 洋一
ニホンザリガニの総合的研究	〃
野外学習のための地理データベース開発	氷見山 幸夫
東アジアの土地利用変化	〃
ティラピア背筋肉構成タンパク質の生化学的研究	浅川 哲弥
大雪山火山の岩石学的研究	和田 恵治
大雪山及び本施設周辺におけるスポーツ事象	三浦 裕

、 利用状況(1～12月)

1. 研究教育活動

期 間	利 用 者	目 的	員 数
1～3月	旭・地学(引率・櫻井兼市教授)	野外実習	12
	旭・障害児教育(引率・古川宇一教授)	研究活動	4
7～9月	岩・美術教育(引率・坂巻正美教授)	野外実習	27
	釧・生物・理科教育(引率・神田房行教授)	野外実習	14
	旭・生物学(引率・橘ヒサ子教授)	野外実習	13
	旭・生物学(引率・蛇穴治夫助教授)	野外実習	14
	旭・生物学(引率・柳田欣作助教授)	野外実習	12
	旭・生涯スポーツ学(引率・速水修教授)	野外実習	24
	旭・教育心理学(引率・今川民雄教授)	研究活動	4
	静岡大学(引率・岩崎一孝助教授)	野外実習	9
	旭・保健学(引率・横田正義教授)	研究活動	7
10～12月	旭・生涯スポーツ学(引率・前田和司助教授)	研究活動	22
	小計12件		162

2. ゼミ活動

1～3月	旭・技術農業ゼミ	ゼミ研修	9
	旭・コミュニティー計画ゼミ	ゼミ研修	8
	旭・地理ゼミ	ゼミ研修	24
	旭・美術ゼミ	ゼミ研修	29
	旭・物理ゼミ	ゼミ研修	8
	旭・物理ゼミ	ゼミ研修	11
	旭・物理ゼミ	ゼミ研修	8
	旭・技術農業ゼミ	ゼミ研修	18
	旭・教育心理ゼミ	ゼミ研修	29
	旭・教育心理ゼミ	ゼミ研修	14
	旭・保健体育ゼミ	ゼミ研修	12
	旭・法政ゼミ	ゼミ研修	23
	旭・数学ゼミ	ゼミ研修	16
	旭・史学ゼミ	ゼミ研修	15
	旭・保健体育ゼミ	ゼミ研修	13
	旭・書道ゼミ	ゼミ研修	18
4～6月	旭・栄養生理学ゼミ	ゼミ研修	13
	旭・教育学ゼミ	ゼミ研修	10
7～9月	旭・法政ゼミ	ゼミ研修	20
	旭・栄養生理学ゼミ	ゼミ研修	16
	旭・保健学ゼミ	ゼミ研修	12
10～12月	旭・哲学ゼミ	ゼミ研修	24
	旭・化学ゼミ	ゼミ研修	30
	旭・教育学ゼミ	ゼミ研修	11

旭・数学ゼミ	ゼミ研修	15
旭・保健体育ゼミ	ゼミ研修	13
	小計26件	419

3. 合宿研修その他

期 間	利 用 者	目 的	員数
1～3月	倶知安中・村上慎司	合宿研修	5
	旭・田村明美	スキー合宿	5
	旭・草嶋都子	スキー合宿	8
	旭・久保聡一郎	スキー合宿	5
	旭・草嶋都子	スキー合宿	1
	旭・高坂和子	スキー合宿	7
	旭・清田美絵	合宿研修	9
	旭・篠田 優	合宿研修	5
	旭・千葉信吾	スキー合宿	12
	旭・工藤詩織	合宿研修	27
	旭・浅川哲弥	スキー合宿	14
	旭・片山良子	スキー合宿	6
	4～6月	旭・袴田悟司	スキー合宿
旭・水牧幸夫		スキー合宿	7
北大・木下才二		スキー合宿	10
旭・古川宇一		合宿研修	12
旭・佐藤 昇		合宿研修	8
北大・木下才二		スキー合宿	2
旭・氷見山幸夫		自然散策	4
北大・木下才二		スキー合宿	4
札・林 義明		自然散策	4
札・林 義明		自然散策	6
旭・草嶋都子		自然散策	3
旭・氷見山幸夫		国際交流	13
旭・前田和司		国際交流	19
旭・皆口健次		合宿研修	7
旭・三浦 裕		自然散策	2
旭・古川宇一		合宿研修	3
札・中西康晴		自然散策	10
岩・古村えり子		合宿研修	32
旭・赤石正吉		合宿研修	2
旭・上岡 宏	合宿研修	27	
7～9月	札・木下建男	登山	3
	旭・片山良子	登山	13
	旭・夏井 毅	登山	5
	旭・古野博明	登山	20

	北海学園大・高橋伸幸	合宿研修	17
	旭・菅股庄二	自然散策	1
	札・飛瀬敏幸	自然散策	4
	旭・浅川哲弥	合宿研修	10
	旭・水牧幸夫	合宿研修	7
	旭・和田恵治	登山	11
	旭・浅川哲弥	合宿研修	13
	札・村山紀昭	合宿研修	14
	岩・テラオ-スィン	合宿研修	4
	旭・片山良子	登山	4
	札・渡部 基	合宿研修	19
	札・嶋崎正躬	登山	2
	札・高野名弘	登山	4
	旭・山田好文	合宿研修	8
	北大・広永輝彦	合宿研修	5
	札・木下建男	登山	2
	札・落合清治	登山	6
	旭・西間節也	登山	2
	帯畜・尾川裕二	登山	5
	旭・板橋トシ子	合宿研修	4
	旭・氷見山幸夫	合宿研修	6
	旭・氷見山幸夫	見学会	10
	旭・川邊淳子	自然散策	1
10 ~ 12 月	旭・杉田誠一	自然散策	4
	旭・片岡繁雄	合宿研修	4
	旭・古野博明	合宿研修	14
	旭・片岡繁雄	合宿研修	6
	旭・大崎功雄	合宿研修	11
	旭・板橋トシ子	合宿研修	7
	旭・菊池崇史	合宿研修	6
	北大・横島大輔	スキー合宿	6
	旭・菊池崇史	スキー合宿	29
	北大・横島大輔	スキー合宿	13
	北大・横島大輔	スキー合宿	13
	旭・菊池崇史	スキー合宿	8
	旭・菊池崇史	スキー合宿	8
	旭・片岡繁雄	合宿研修	14
	旭・袴田悟司	スキー合宿	3
		小計74 件	643
		合計112 件	1224

施設案内

大雪山自然教育研究施設は、大雪山一帯の地域研究の基地として、本学の教職員及び学生の教育研修並びに自然の調査研究を行うことを目的として設置されたものです。

施設は、雄大な自然にかこまれた自然公園として、わが国最大の大雪山国立公園内、旭岳(2,290m)の山麓、旭岳温泉郷に位置し、四季を通じて利用できます。

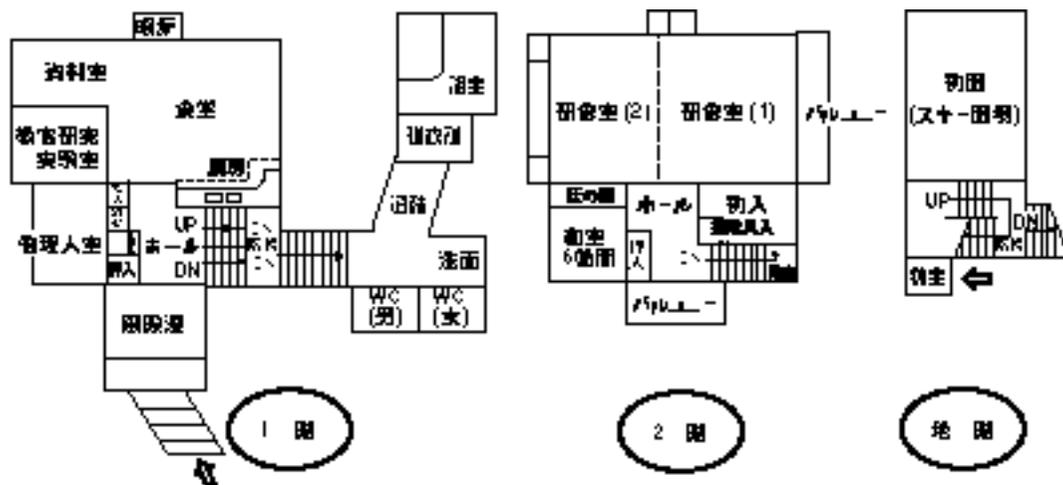
また、姿見の池から裾合平に至る一帯には、エゾコザクラ・キバナシャクナゲ・イワウメ・エゾノツガザクラ等本州の山岳であれば3,000m級の山々に分布する高山植物が生育し、海拔1,500m以下にはトドマツ・エゾマツ・アカエゾマツの針葉樹にダケカンバのような広葉樹を混じえた北方針葉樹林が分布しています。これら原生自然環境下にはエゾシカ・キタキツネ・ヒグマ・ナキウサギ・鳥類・昆虫類が生息し、野生動物の宝庫ともなっております。また、夏の登山・冬のスキーにも絶好の環境のところですよ。

使用に当たっては本学の事業に支障がない限り学外者も受け入れています。

施設概要

- | | | | |
|--|----------|-----------|------|
| 1.土地 | 1,654 : | | |
| 2.建物(木造地下1階・地上2階建) | 270.46 : | | |
| 3.施設の内容 | | | |
| 研修室(1) | 28 : | 食堂(厨房) | 39 : |
| 研修室(2) | 27 : | 管理人室 | 10 : |
| 和室(6帖間) | 10 : | 浴室、脱衣室 | 18 : |
| 教官研究実験室 | 10 : | 物置(スキー置場) | 28 : |
| 資料室 | 10 : | | |
| 4.収容人数 | 30名 | | |
| 5.食事 自炊(材料、調味料等各自持参)、付近には食堂(えぞ松荘他)もあります。 | | | |

建物平面図

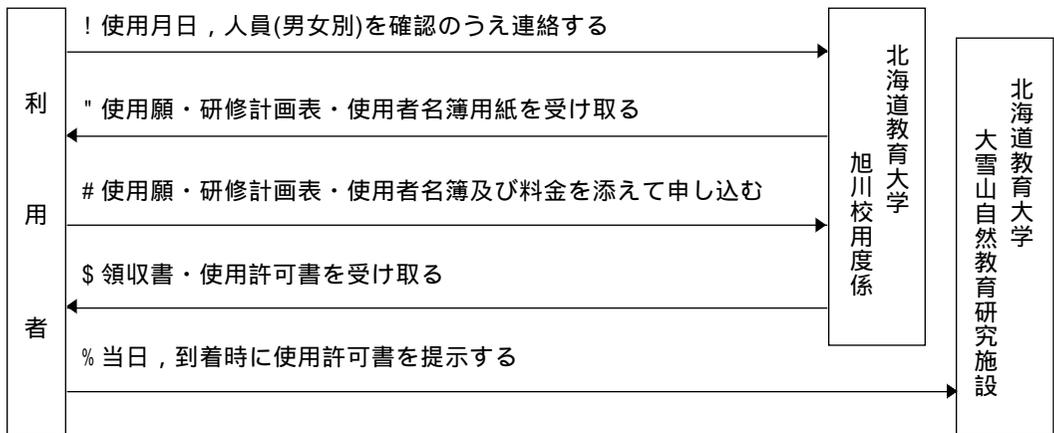


使用案内

使用者の範囲

1. 本学の教職員及び学生
2. その他施設長が適当と認めた者

申込手続等



《注意》

- 使用願の申請は、使用開始10日前までに旭川校用度係に提出すること。
- 使用申し込み後の変更等については、使用の2日前（ただし、土曜日、日曜日、国民の祝日、休日及び年末年始（12月29日から1月3日まで）は除く。）までに申し出ること。
- 使用期間は、原則として1回7日以内とする。

= 交通案内 =

旭川電気軌道バス

旭川駅 旭岳線66番「旭岳ロープウェイ」下車(1時間40分)徒歩5分

旭川駅 旭岳ロープウェイ間 42.5km

旭川駅から旭岳ロープウェイで降車の場合は無料です。旭岳ロープウェイから旭川駅への復路については無料チケットを用意しますので申込手続時に必要枚数を連絡下さい。

なお、ロープウェイは平成10年10月から平成12年7月（予定）まで、改修工事の為運休しています。

北海道教育大学大雪山自然教育研究施設研究報告刊行要綱

1. 研究報告の刊行に関する基本的事項について、この要綱の定めるところによる。
2. 研究報告には、旭川校専任教官が、大雪山に関する学術研究及び調査並びに本施設を利用して行った学術研究及び調査の成果を掲載することを原則とする。
3. 研究報告は、毎年1回3月に発行する。
4. 発行部数は、450部とし、寄贈、配布先等については別に定める。
5. 投稿者の範囲は、旭川校専任教官とする。共著の場合は、旭川校専任教官が第一著者であることを条件とする。
ただし、次の各号の一に該当する場合は、運営委員会の承認を経て掲載することが出来る。
 - (1) 旭川校専任教官と他分校専任教官との共同研究で、第一著者が後者の場合。
 - (2) 旭川校専任教官と学外の研究者との共同研究で、第一著者が後者の場合。
 - (3) 旭川校卒業生の研究で、旭川校専任の指導教官の推薦がある場合。
 - (4) 運営委員会の議により、分校外の研究者に研究を委嘱した場合。
6. 研究報告を編集するため、編集委員会を置く。
7. 編集委員会は、編集委員長と編集委員(若干名)とで構成する。
編集委員長は、施設長がこれを兼任し、編集委員は、運営委員会の議を経て施設長がこれを委嘱する。
8. 編集委員会は、受理した原稿の採否を審議し、原稿記載上の注意及び印刷の体裁、その他編集上必要なことを決定する。
9. 編集委員会は、必要に応じ、委員以外の者の出席を求めて意見を聞くことができる。
10. 報文は、原著に限る。
11. 原稿記載上の注意は、北海道教育大学紀要原稿記載上の注意事項(平成8年1月18日改正)に準ずる。
12. 投稿締切日は、毎年1月末日とし、原稿は施設長に提出する。
13. 校正は、原則として、二校まで著者が行うものとする。
14. 別刷は、和文欧文とも50部を無償とし、この部数を超える場合は、有償とする。ただし、有償の部数は50部を単位とする。

附 則

この要綱は、昭和52年3月16日から施行する。

附 則

この要綱は、平成8年7月3日から施行する。